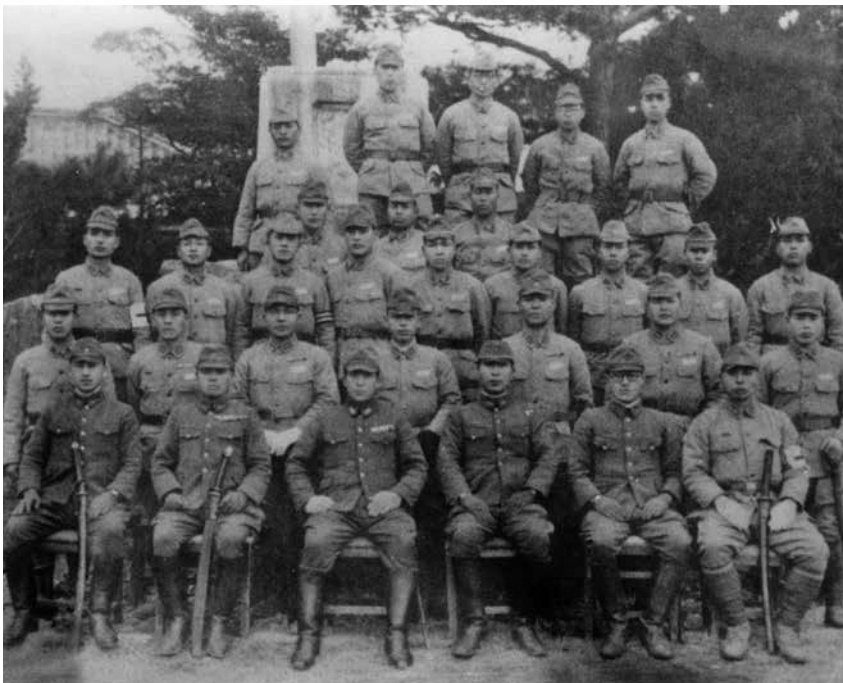


市史通信

【目次】

- 体験記から戦争・空襲を知る
- 佐藤敬、従軍地からの手紙
- 横浜の古民謡
- 開架資料紹介
『横浜市瓦斯局事務報告書』
- 市史資料室たより



横浜警備独立歩兵第14大隊本部将兵 1945（昭和20）年3月
浜田聯隊で横浜に出発する前に撮影した記念写真

第23号

【発行日】2015年7月7日
 【編集・発行】横浜市史資料室
 〒220-0032
 横浜市西区老松町1番地
 横浜市中央図書館・地下1階
 【電話】045-251-3260
 【FAX】045-251-7321
 【E-mail】
 so-sisiryu@city.yokohama.jp
 【ホームページ】
<http://www.city.yokohama.lg.jp/somu/org/gyosei/sisi/>

横浜の空襲と戦災関連資料

体験記から戦争・空襲を知る

『横浜の空襲と戦災』編集時に市民から寄せられた体験記は、体験者が少なくなりつつある現在、空襲や戦争を追体験するための貴重な証言である。

それらの体験記は、『横浜の空襲と戦災』（横浜の空襲を記録する会編、横浜市発行）の「1 体験記編」（一九七六年）、「2 市民生活編」（一九七五年）および『調査概報』第五集（一九七六年）に掲載されている。その数は、あわせて三九〇編に及ぶ。

ところが、『横浜の空襲と戦災』編集に当たって体験記の一部は、紙数に限りがあること、さらに空襲の体験を伝えることに主眼があつたため、戦中・戦後の暮らしに関わる記述などが省略されている。また、体験記の中には、体験者自らが描いた絵や図が添えられている場合もあるが、すべて省略されている。その他、体験記の筆者の中には、日記や写真その他の資料をご提供くださった方も多い。

体験記の原稿は、返却分を除いて横浜市史資料室が保存している。そこで当資料室では、省略分もあわせて体験記の内容を改めて調査する作業を行っている。さらに、日記や写真などの資料との照合作業も始めたところである。いずれ、その結果についての概略と目録などをまとめる計画である。

今回はその中から、これまで紹介されていなかったものもあわせ、体験記の内

容や写真の一部を紹介したい。

また、七月一八日から開催する当室展示会「戦争を知る、伝える―横浜の戦争と戦後」でも、その一端を紹介する予定である。

横浜警備部隊

横浜では、空襲に関する記録が多く残されている一方、兵士や軍隊・軍施設に関する記録は少ない。体験記の中には、高射砲部隊や警備部隊の一員として横浜に駐屯して空襲に遭遇した兵士の証言もある。

なかでも横浜警備独立歩兵第一四歩兵大隊の大隊長中川福栄少佐の証言は、陸軍警備部隊の実情をよく伝えている（体験記編二六二ページ）。同大隊は本土防衛のために一九四五（昭和二〇）年二月、広島師団管区内である島根の浜田聯隊留守部隊によって急遽編成された。五〇〇名ほどの規模で、三月初めには横浜に到着したという。上の写真は、出発前に浜田聯隊で撮影された部隊本部将兵の記念写真である。

部隊は、浜田駅から横浜まで汽車で移動した。新子安駅で全員下車して、ひとまず浅野中学校に集合した。やがて、旅団長を迎えて運動場で閲兵式を行った（未掲載体験記）。数日同中学校に宿営の後、神橋小学校（当時は国民学校）に大隊本部と直轄の第三中隊を置き、横浜第二中学校（現横浜翠嵐高校）に第一中隊、下末吉小学校に第二中隊を配置した。



写真1 中川福栄大隊長と副官
1945（昭和20）年 横浜の空襲と戦災関連資料

ところで、同部隊が横浜に来た三月以降は、まさに空襲が激しくなった時期である。四月のある日、同部隊からも空襲の被害者が出た。下末吉小学校に分屯していた中隊は、空襲警報と共に不動の森の斜面に掘ってあった各個防空壕（俗称蛸壺）に小隊ごとに退避していた。その内のいくつかに爆弾が直撃し、一四人の兵士が死亡した。その内二人については、まったく遺体も見つからなかったという。

大隊長の宿舎として菊名池のほとり富士塚近くに借家が用意され、中川大隊長は馬で部隊へ通った（未掲載体験記）。写真1は、馬上の中川大隊長と副官である。同部隊は本来、防衛陣地の構築を任務としていたが、当面は防火地帯のために建物疎開の作業に当たった。また、本部と各中隊ごとに、自営防空壕をつくった。さらに、食糧確保のため各部隊から農民出身の兵士を出して農耕隊を組織し、保土ヶ谷ゴルフ場の開墾にも当たった。

興味深いのは、不発の焼夷弾を集めて、中の油脂を取り出しガソリンを精製したという証言である。ドラム缶で一〇本近くできて、自動車の燃料に利用したというから本格的である。空襲で焼け出された人が、焼け跡で不発弾の油脂を燃料にしてドラム缶の風呂を沸かしたという証言（体験記編一二八ページ）はあるが、これだけ組織的な例は他にあまり見ない。

五月二十九日の横浜大空襲では、いずれの部隊も被災を免れ、東神奈川駅付近に救援本部を置き、遺体の収容などに当たった。しかし、その後の空襲で本部のあった神橋小学校も校舎一棟を残して焼失し、この一棟に本部と一個



写真2 独立歩兵第14大隊空襲犠牲者の告別式
1945（昭和20）年4月 下末吉小学校

横浜の空襲と戦災関連資料

中隊が「すし詰め」状態であったという（未掲載体験記）。ただ、神橋小学校焼失の日付については、四月二四日ともされるが（『横浜市学校沿革誌』一九五七年）、証言との矛盾もあり、はつきりしない。

結局、同部隊は陣地の構築に取りかかることもなく、また農耕隊の収穫も間に合わず、敗戦を迎えて解散するに至ったのである。

機銃掃射

空襲に関する証言のなかで、機銃掃射についての証言も数多い。しかし、具体的な内容には乏しい。また、記録の上でも艦載機や戦闘機P51の機数は記録されているが、地域ごとの被害状況などは詳らかではない。

当時戸塚の海軍病院に看護婦として務めていた横田晴江さんの体験記は、機銃掃射を受けて九死に一生を得た体

験を語っている。横田さんの体験記は、掲載されていないので、この機会に紹介したい。なお、横田さんの戦前から戦後にかけての日記が、体験記編と市民生活編に収録されている。

当時の戸塚区から磯子区にかけては、海軍関係の施設や工場などが多くあった。そのため周辺は、たびたび空襲を受けている。B29による爆撃についても、二月一日という早い段階で少数機による空襲があった。死者三人が記録されているが、横田さんの日記には数十名の死傷者が出て治療に当たったことが記されている（体験記編五四二ページ）。警察の記録以外では、ほとんど唯一の証言である。

一方、横田さんの体験記を読むと、この地域の特徴として機銃掃射が多かったことが推測できる。四月頃には患者の疎開が進み、すでに患者の数は減っていた。ずいぶん前に「自給自足の命」があつて、横田さんらは近所の農家の畑を借りてさつまいもを作っていた。空襲警報がなると、動けない患者は担架に乗せてベッドの下に押し込み、動ける患者だけが防空壕に入っていた。患者を送り出し、ベッドの下の患者を見回す頃には艦載機がやってくる。ベッドの下の患者に「心を残しながら」、横田さんは退避のつもりか「トイレに入った」。

そこに、急降下で敵機がやってきて、「とたんに機銃掃射の音、パツと屋根を突き破って、私の頬をかすめた」、「ト

イレの床に突きささった敵弾、一瞬の出来事」だった。「頬のあたりが焼ける様に感じた」。「なんとという幸運か、あと2cm、いや〇、5cmずれていたら」と感じたという。

やがて六月にもなると、「もはや警報も慣れて敵機をみなければ退避しない」ようになっていた。そこで、「空を見上げながら草取り」をしていた。

警報がなった後、空を見上げると、小さい機影が急降下の態勢に入ろうとしている。「あわてて、松林の中に逃げる」。「降下の時は爆音はしない」のだという。「松林に入るが早いか機銃の掃射、パッパツと土煙が上がる」。

横田さんは、ここは「病院なのだ」、「大きな赤十字のマーク」も「屋根に書いてある」、それなのに「草取りをする私達めがけて二機」が襲ってきて、とてもくやしい思いをした。敵機は「号音を上げて今度は急上昇」し、また「ぐるりとまわって」急降下と、三回ほど繰り返し続けた。「まるで鬼ごっこね」と同僚と苦笑いしながら、遠ざかる敵機を見送った。

こうした日々を繰り返すうちに、八月一五日の朝を迎えた。「毎日の様に襲い来る敵艦載機も今朝はまだ来ていない」と思っていた。いも畑の草取りに汗

を流した後、昼食をとろうと寮に帰った横田さんらは、そこで玉音放送を聞くことになる。くやしくて、皆部屋に戻って泣きじゃくったという。その夜は、いつも「真暗であった病院が今夜ばかりは窓を思いきり開いて電灯の光が一晩中輝いていた」。横田さんは、その明るさを「夜明けの様に」感じ、「心

の底からうれしかった」と記している。
六月一〇日の空襲

横浜における空襲で、一〇〇人を超す死者を出したのは、四月四日・一日と五月二九日、そして六月一〇日である。

この内四月四日と六月一〇日は、工場をねらった通常爆弾による精密爆撃で、被害の様

相も異なる。火災でなく、爆弾による破壊と爆死が、その特徴といえる。家が吹き飛んだり、爆風で人が飛ばされたり、また逃げ込んだ防空壕に爆弾が直撃して多くの犠牲者を出したという証言がある。

本牧の饗庭富美子さんは五月二九日に被災して、また六月一〇日に被災した。このように、複数の空襲に遭遇した証言も多い。パン屋を営んでいた饗庭さんは、夫の出征後実家近くの本牧和田山下で間借り暮らしをしていた。五月二九日の空襲で焼け出され、大里町の焼け残りの家に移った。

六月一〇日、空襲警報で饗庭さんは、軍が掘ったという八聖殿下の横穴式防空壕に逃げた。「解

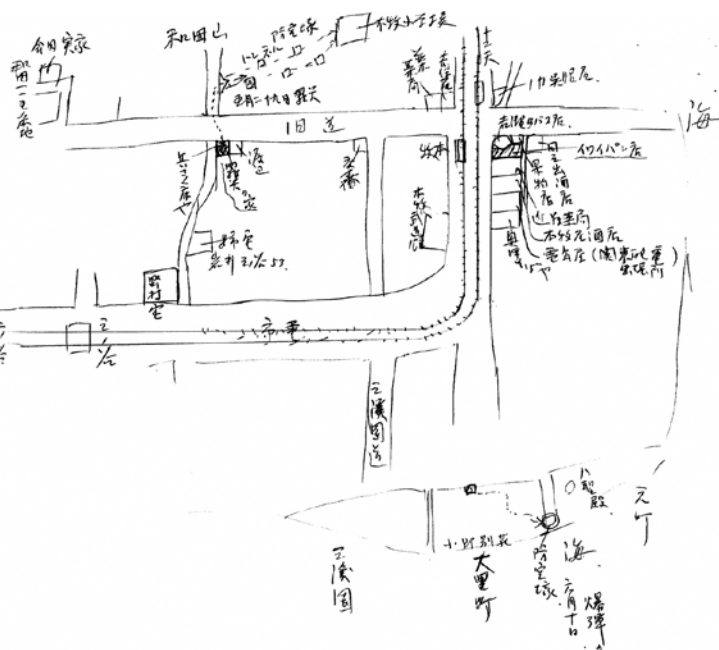
除」の声で近くの人や身軽な人が帰った後、「イキナリ、ドカドカと、スサマジイ音に子供達をかかえて壕に向かって走り込み伏せ」た。「ザァーと土をかぶり」、「赤子の声にわれにかえ」と、周りは「泥、血、動かない人、母親は倒れ」、「子供は帯でゆわかれて血だらけで泣いている」といった悲惨な状況だった。

兵隊さんが「生き残っている者、出て来いとどな」りながら、「赤ん坊をだいてよしよしと身体をゆすつて」いたという。防空壕を出ると二メートルほど先に「八畳じき位の大きな穴」があり、「当たりに家はなく、三、四コ大きな穴がならんであいていた」。家が木つ端みじんに吹き飛んだようだ。

この日の空襲は、本来富岡の日本飛行機をねらっていた。ところが、根岸湾の対岸である本牧にも爆弾が投下された。たとえ軍需工場をねらった精密爆撃であっても一般市民に深刻な被害をもたらしたという点で、六月一〇日の証言は意味深い。

その後、饗庭さんたちは子供達のためを思い、静岡の義姉の家を頼って移った。そこでまた、静岡空襲（六月一九日か）に遭遇する。義姉の家は被害なく、家族は幸い無事だったが、このように疎開を繰り返す内に家族が犠牲になったり、バラバラになってしまった例もあった。それもまた、空襲が人びとの生活を破壊した被害の一面といえよう。

（羽田博昭）



饗庭富美子さんの体験記に添えられた自筆の略図

5月29日には図上部の本牧小学校近くで被災、6月10日は図下部の八聖殿下の防空壕で爆弾の直撃を受けた

横浜の空襲と戦災関連資料